

1 「IEレビュー」誌とは

「IEレビュー」誌は、IE（インダストリアル・エンジニアリング）に関する研究・論説やIEの実践事例の紹介を通じてIEの普及・発展を図ることを目的とし、日本で唯一のIEの専門誌として、1960年に創刊され、2025年には創刊65年を迎えました。IEは日本の戦後の復興期、バブル期、停滞期、そして変化の速い今日においても、モノづくりを中心に、品質・コスト・生産性を改善する手法・考え方として活用されてきました。

本誌は、各号に「特集テーマ」を掲げ、そのテーマにそって論壇、ケース・スタディ、プリズムを掲載しています。ケース・スタディでは、特集テーマに則したタイムリーな事例を、図表や写真を活用して具体的に紹介するよう努めています。また、各号は、日本IE協会、中部IE協会、関西IE協会、九州IE協会の4団体が特集企画を担当し、各地域に根ざした企業の事例など、特集テーマにそった地域発の情報を発信しています。特集テーマ以外にも、巻頭言、会社探訪、現場改善、連載講座、ビットバレーサロンなどのコーナーを設け、できるだけ多面的にIEの活用事例、課題、展望を読者に提供し、IEの研究・展望、産業界での普及に努めようと編集しています。

2 特集テーマの検討にあたって

年間の特集テーマは、12月～1月に開催される合同編集委員会で議論して決定します。今回も、昨年12月の委員会で議論しました。特集テーマを決める際に重視していることは、主に以下の3点です。

1つ目は、IEの本質を考え、適用可能性を探り、対象の広がりを示すことです。もともとIEは、生産工程のQCDを維持・向上させる方法として発展してきました。しかし近年では、その考え方や手法を、サプライチェーン、バリューチェーンで広く適用する事例や、海外拠点で広く用いる事例が増えています。サービス産業や農業など、他の業種で応用する事例も増えつつあります。また、IoT、AI、ビッグデータ解析など、情報技術抜きでIEの適用を考えることはできません。データの収集や有効活

用には、IEの見方や考え方が必要になるので、IEをもっと普及させるためにも、日常生活から経営まで、幅広く適用事例を紹介していくことが必要と考えています。

2つ目は、改めて「IEの原点」を考えることです。IE的な見方や考え方の適用対象は広がっていますが、企業活動はグローバル化し、IEの専門スタッフを育成しながら改善活動に取り組む余裕は失われがちです。長期的な人材育成や企業体質強化が重要とされる一方で、短期的な施策とその成果にとられる傾向があります。製品のライフサイクルが短くなると、標準化を大切にす意識が希薄になっていきます。しかし、長期継続的な活動を進め、企業の体質や風土を強化する意味で、IEは重要な役割を担っています。本誌が活用されるためには、時代の流れに逆らうように見えても、IEの原点を問い続ける姿勢を忘れてはなりません。

3つ目は、「現場の感覚」を伝えることです。IEは標準化や改善を通じて経営に貢献する技術ですが、現場での工夫や苦勞に触れずにIE活動を考察しても、本質に迫ることは困難です。人材育成も、QCDの管理・改善も、その出発点は現場です。デジタル機器やオンラインが普及し、遠隔地からカメラやセンサーを活用して現場の状況を把握できる環境が整備されても、現場に自ら足を運ぶ姿勢は、IEの原点です。「IEレビュー」誌は、現場の感覚を忘れず、その誌面を通じて、現場を大切に、「現場の匂い」を伝える雑誌でありたい、そう考えています。

3 特集テーマを考える視点

本誌では、例年は、上記の考え方をベースとして、各号の特集テーマを決定していますが、生産人口の減少と技術の高度化が進む中で、日本のモノづくりが活性化しているとは言えないという問題意識があります。東北IE協会が解散し、本誌の読者層も広がっているとは言えません。そこで今年は、編集委員から提案されたテーマを参考にしつつ、広い視点で毎回の特集テーマの方向性を定め、各号でのフォーカスは、各号ごとに企画チームでの議論で固めていくこととしました。各号ごとに詳しくテーマを決めてしまうと、どうしても年間4テーマのつ

ながりが希薄になりがちで、各号のテーマが、時代のニーズや流行に左右されがちになってしまいます。変化の激しい時代に、日本のモノづくりをもう一度ワクワクする活動としたい、日本を元気にしたい、そのための方向性を考えてみたい。そういう問題意識がベースになっています。

4 各号の特集テーマ

1つ目に候補になったのが、「マンネリからの脱却」というテーマです。IE活動を進めている企業は少なくありませんが、それらの事例の根底にあるのは、従来から存在しているIEの見方・考え方です。例えば、トヨタ生産方式は1990年代から多くの生産企業で展開され、QCサークル活動も活発に発表大会が行われてきましたが、継続効果の一方で、どの企業でもマンネリ感があることは事実でしょう。1つの活動を深め、やりきることと並行して、日本のモノづくりを覆っている閉塞感を打破したい、そのための事例・情報・メッセージを発信したい、というのが特集テーマの内容です。そこでは、企業という枠を超えて、座学・異業種などで緩やかに連携しながら進められている活動も対象になります。造船や半導体など、一部のモノづくり企業が成長している今こそ、IEの培ってきた知見を整理して発信したいと考えています。

2つ目のテーマは、日本のモノづくりを元気にするための人材に関する内容で、方向性としては、「改善を楽しむ」「改善文化づくり」といったキーワードで示されるテーマです。人材育成の体系や仕組みというよりも、IE活動で目の輝く人が育った事例、エンゲージメントが高まった事例などを通じて、明るく楽しい改善文化を企業に形成するための視点を考えてみたい。IEを学ぶ若い学生諸君に期待値を語ってもらうのも一案でしょう。1つ目のテーマである「マンネリからの脱却」を、人の側面から考える特集と言っても良いと考えています。

3つ目のテーマは、サービス業への適用を中心として「拡がるIE」です。ツーリズムに対応した旅館やホテルでの改善事例、その他サービス業への展開、物流での活用など、IEの対象領域は広がっています。農業などへの応用事例が報告されている一方で、サービス業には、価

値が測定しにくく、受け手により価値の認識が異なること、ムダを排除して効率化を進めることとヒューマンタッチのバランスなど、モノづくりとは異なる特性があります。最近では、行政の窓口や病院でも効率化が注目されていますが、それぞれの業態において付加価値とムダの概念を改めて整理してみるプロセスから、付加価値とムダについて見直す視点が得られるのではないのでしょうか。そうした視点は、IT化が進む中で、避けて通れない課題を考える切り口になるので、改めて「日本を元気に」という方向性について考えてみます。

4つ目のテーマとして、今年の6月号で予定されている「AIの活用」を再度取り上げて、「AI活用を再考する」としました。もちろん、この先1年間での活用事例も含まれますが、中心は、「データの見える化」です。生成AIは大きく進化していますが、AIの基本は、膨大なデータを集計・推論することであり、使い手の立場からは生データが見えにくくなっています。一方で、IEの基本は、データを見える化・共有化すること、その方法を工夫すること、そのデータから原因や対応策を考えていくことにあります。そしてそのプロセスは、現場が楽しく改善を進めていくための出発点になります。こう考えると、AIとの向き合い方は、IEの普及を考える上で避けて通れないテーマであり、AI時代に、いかにデータソースを見える化していくかを考え直します。

今年の特集テーマは、社会的に注目されているテーマというよりも、IEの普及という役割に貢献し、日本のモノづくりを元気にしたいと考えています。それは、IE協会の活動領域を再考することにもつながるでしょう。各号のテーマは下記の表のように予定しています。編集委員会の考えを少しでも実現すべく、企画・編集作業を進めていきたいと考えています。

(編集委員長／河野 宏和・慶應義塾大学)

発行年月	号	特集テーマ (仮題)	担当協会
2026年 9月	344	改善を楽しむ	九州
	12月	拡がるIE	中部
2027年 3月	346	マンネリからの脱却	日本
	6月	AI活用を再考する	関西